
モンゴルの牧畜は生業的か

——家畜糞の多角的利用より

風戸 真理 Mari Kazato

北星学園大学短期大学部 Hokusei Gakuen University Junior College email : kazato@hokusei.ac.jp

本論はモンゴル国の牧畜における家畜糞（以下、畜糞）の利用を事例とし、生業と産業の領域がどのように併存しているのかを議論するものである。モンゴル社会は1920年代からの社会主義化と1990年代からの市場経済化によって産業化されてきた。しかし、人類学者はモンゴルの家畜飼育を、産業社会の「畜産」や「酪農」と区別して「牧畜」と呼んできた。モンゴルの家畜飼育はなぜ「生業」的な「牧畜」とみなされるのだろうか。

「生業としての牧畜」は、家畜を所有し、飼育する人びとが畜産物に依存し、これが文化諸要素と多面的に結びつく総合的な活動を意味する。ただし、現代の生業には「市場」や「商品化」の諸要素が混ざっている。モンゴルの家畜生産は社会主義期から現在に至るまで、商品化、産業化され、畜産物の多くが輸出産品となってきた。肉・乳・毛・皮革は工場で処理され、国内外に流通してきたが、人びとは家畜や畜産物を自家消費や贈与の領域でも用いてきた。その中でも畜糞は、国家統計年鑑に生産量や輸出量の記載がないことから、自家消費の度合いが強い畜産物であると考えられる。畜糞は、燃料・家畜囲いの材料・家畜管理の道具・畜産物加工の道具などとして基本的に自家消費されてきた。つまり畜糞は「産業社会」の周縁で、「生業」的な領域を形づくってきたのである。

畜糞の利用をめぐるのは、精緻な民俗知識に裏づけられた「共時的な多角性」と「通時的な多層性」、そして家畜の排泄物で家畜の世話をし、その畜産物を加工する再帰的な「家畜＝畜糞関係」がみられた。さらに、畜糞の煙とその匂いは都市生活者を含むモンゴル人の思考の材料および牧畜生活の記憶の手がかりとして、アイデンティティーのよりどころとなっていた。以上から、モンゴルの牧畜は「生業」と「産業」の重なりの上に成り立っており、畜糞は文化に埋めこまれて「牧畜文化」を形成していることが示された。

[モンゴル牧畜、家畜糞、生業、産業、アイデンティティー]

I 序論

II 先行研究と調査について

- 1 牧畜研究
- 2 畜糞研究一般
- 3 モンゴル畜糞研究
- 4 本論の視座

III 畜糞利用の多様性

- 1 名称体系
- 2 燃料としての畜糞
- 3 家畜囲いとその寝床マットとしての畜糞
- 4 家畜管理および畜産物加工の道具

IV 「家畜＝畜糞」関係の再帰性

V 産業社会における畜糞

VI 結論

I 序論

本論は、畜産物としての畜糞の多角的な利用方法を明らかにすることを通して、モンゴル国の家畜生産において生業と産業の領域がどのように併存しているのかを議論するものである。モンゴルは社会主義化と市場経済化を経験してきた産業社会である。モンゴルの家畜生産は一般的には畜産業と呼ばれるが、人類学者はこれを「牧畜」、その活動主体を「牧民」と呼んできた。本論でもひとまず、牧畜／牧民という用語を用いながら、その意味と是非を検討していく。

現在のモンゴル牧民にとっては「家畜は自給用というよりは商品という性格」（本特集「序」参照）が強いが、モンゴル国の牧畜は完全に市場化されているわけではなく、そこには生業的な要素がくみ込んでいることに鑑みて、本特集は「市場化・脱生業化時代における生業論の在り方について再考する」（本特集「序」参照）ものである。畜糞は、生業的な牧畜社会では畜産物としてプラスの価値、産業社会では廃棄物としてマイナスの価値が付与されてきたモノであるが、モンゴルでは畜糞が畜産物として活用されており、モンゴル牧畜の生業性がうかがえる。

ここで、本論のキーとなる用語を定義していく。第一に、「生業」である。生業 (subsistence) の辞書的な意味は「最低レベルで自身を支え、維持する行動やこと」(*New Oxford American Dictionary*, Third Edition)、つまり「かつかつの自給活動」を指し、経済的な量としては取るに足りないものである。しかし、人類学は生業を文化的な視点から見直してきた。松井は、生業を「経済 (subsistence economy)」の領域にとどまらない、総合的な「活動 (subsistence activity)」と捉えた。つまり、「その土地の人びとが、そこで生きていくための物質的基盤をつくりだす」[松井 2011: 3] のに加えて、生業資源と人間との結びつきから宗教や世界観が発達し、労働の組織化や生産物の贈与に関わる社会関係が構築される、といった総合性である [松井 2011: 3-5]。

第二に、「牧畜」である。これは、「採集・狩猟 (漁労)」「農耕」と並ぶ人類の三大生業の1つである。その物的基盤については、家畜を基本的な財とする人びとが、肉・乳・毛・皮革・畜力・畜糞

といった畜産物に生活のさまざまな面で依存するものである。同時に、松井による生業の定義を応用すれば、家畜と人間との結びつきから文化・社会的な諸要素が発達した総合的な活動系であるといえる。牧畜について詳しくはⅡ章で述べる。

第三に、「産業」である。『社会学事典』によれば、産業は広義には、第1次産業から第3次産業までの経済活動全体を指すが、狭義には「工業」に限定され、もっといえば「機械制大工業」を指す [田中 1994]。「産業化」とは、産業構造の変化を意味し、社会の生産の中心が伝統的な農業生産から近代的な工業生産へ移ること [小林 1994]、換言すれば、社会が工業化することである。社会主義期のモンゴルは産業化された社会であった。ただし、産業化の単位は国家や産業圏である。産業の担い手は企業や事業所であって、農民や牧民個人ではない。個人の経験としては、生産と産業の間にある「市場」や市場に向けた「生産」があるだろう。人類史は市場を結節点として、互酬性が規範となる「共同体経済」と、資本主義を理念とする「市場経済」の2つに分けられるが [今村 1994]、個人がおこなう共同体経済的な行動は「自家消費」や「贈与」であり、市場経済的な行動は「交換」や「商品化」である。

ここで生業と産業の関係を整理すると、生業を文化的価値が強く働く活動体系、産業を生産志向の工業的な経済の領域と対置することができる。家畜飼育に関していえば、「牧畜＝生業」「畜産＝産業」という対応が成り立ち、活動体系とその従事者の関係は、「牧畜＝牧民」「産業＝畜産農家 (肉生産中心)・酪農家 (乳生産中心)」となる。なお、「牧民」は単なる家畜飼育者であるが、「牧畜民」は他集団との生業やエスニティーの差異を明示する概念であると筆者は考えるため、本論ではモンゴルの家畜飼育者を「牧民」と呼ぶ。

モンゴルは、1920年代～1980年代の「社会主義化」と1990年代からの「民主化・市場経済化」という2つの時代に区分される二重の産業化を経験している。社会主義期のモンゴルでは計画経済体制のもと、牧畜は集団化という形で産業化された。社会主義政府は全国の牧民と家畜を「ネグデル (*negdel*)」と呼ばれる牧畜協同組合に組織し、家畜は性・成熟度別の群れに分けられた [小貫

1993 : 199-207]。そして牧民は、ネグデルが所有する「単一の性・成熟度の家畜群」を専門的に世話する分業体制に組み込まれた賃金労働者となった [風戸 2009 : 196-234]。市場経済化後、牧民は、肉・乳・毛・皮革・畜力・畜糞などの畜産物を自家消費するとともに、ヤギのカシミア毛などの高価な換金畜産物の販売収入により自動車やマンションを購入し、家畜生体・肉・乳製品を売って日常生活に必要な工業製品を買ったり [堀田 2016 : 136-139]、教育費・医療費を捻出している。このように、20世紀以降のモンゴル社会は産業化・市場化へのプロセスをたどってきた。牧畜を構成する諸要素は時代により変化してきたが、継続しているのは家畜を舎飼いせずに周年放牧する点である。

本論では、市場経済化以降のモンゴル国における畜糞利用を記述することを通して、生業と産業の併存として成り立っている牧畜のあり方を示していく。モンゴル国は二重に産業化へ方向づけられてきた国なので、そこに生業的な要素を見つけることができれば、「市場化・脱生業時代」における牧畜の現代的なあり方が示されるだろう。生業は、先述した松井の定義を要約すれば、(1) 土地への立脚、(2) 生産物への依存、(3) 文化的価値や社会関係と結びついた総合的な活動、に特徴づけられる。生業へのコミットの度合いを証明するのに、畜産物の中でもとりわけ畜糞がクリティカルだといえる理由は次の二点にある。

第一に、畜糞の経済的価値の低さである。畜糞の生産量や輸出量は、筆者が確認しえた社会主義期(1921~1981年)の総覧統計と市場経済化期(1997~2013年)の年次ごとの国家統計年鑑には記載されていない [Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR 1981 ; NSO 1997, 1999, 2000, 2001, 2002, 2005, 2008, 2010, 2013a]。二木も、「息以外はすべて利用する」というモンゴルのことわざを挙げて、1920年代まではモンゴルの家畜が肉・毛皮・骨・糞に至るまで徹底的に利用されていたと強調するが、1960年代~1990年代の畜産物生産に関する記述の中では畜糞には言及していない [二木 1993]。とはいえ、社会主義期以降に畜糞利用が途絶えたというわけではなく、自家消費やローカルな流通が主であり、全国流通や国外輸出の対象となりに

くかったことを示唆するものであると考えられる。

第二に、エネルギー革命段階における低次元性である。世界での主要なエネルギー源は、乾燥地では畜糞、湿潤地域では薪や炭といった植物性燃料から、石炭・石油・天然ガスなどの化石燃料、そして原子力に移行してきた。産業革命が化石燃料の大量消費とともに進行したことから考えても、畜糞の利用は生業的といえるだろう。モンゴルの牧畜地域で主に使われる燃料には、畜糞と薪に加えてガスと石炭¹⁾がある。首都ウランバートルをはじめとする都市部では、石炭・石油・ガス・薪などが使われている。ただし先進的な産業社会では、畜糞などのバイオマスエネルギーが、化石燃料や原子力に代わる次世代の持続的エネルギー資源として使われ始めていることを申し添えておく。

本論の構成としては、続く第II章で生業論と畜糞論の先行研究をレビューし、第III章では調査結果として、畜糞の名称体系および、燃料・建材・家畜管理の道具といった畜糞利用の多様性を記述する。以上のデータから、第IV章では、モンゴルの「家畜=畜糞関係」は再帰的な関係システムを形成していることを指摘する。続く第V章では、産業社会としてのモンゴルにおける畜糞の位置づけを、人びとのアイデンティティーの観点から議論する。第VI章は結論として、生業と産業の要素が併存するモンゴルの現状を畜糞から証明したこととその意義を述べる。

II 先行研究と調査について

1 牧畜研究

生業的な牧畜は、生活の物的基盤の創出にとどまらない総合的な活動であり、これは「牧畜文化」として論じられてきた。「牧畜文化」に関するこれまでの議論は、家畜と文化諸要素との結びつき、ドメスティケーション・プロセス、人間と家畜の関係、国家経済との関係、の4つに分けられる。家畜と文化的諸要素の関係については、東アフリカの「牛文化複合」と呼ばれるようにウシが文化の中心を担う社会や [Herskovits 1926]、ラクダに価値を置く社会が報告されている [佐藤 1992]。ドメスティケーション・プロセス研究は、野生動物の家畜化過程の解明を目的として、放牧場面などにおける人間と家畜とのすり合わせ的な関係行動を記述することで、言語を持たない動物

と人間とのあいだの交通（コミュニケーション）と共生の成り立ちを探るものである [谷 1976；太田 1982；鹿野 1999；風戸 2009：77-131；波佐間 2016：199-173；菅原 2017：232-279]。人間と家畜の関係については、家畜が思考の材料となっていること [谷 1994：701]、牧民が家畜に個性を強く認め、家畜の母系の系譜が認知されていることなどが発見されてきた [太田 1987；風戸 2009：196-234；波佐間 2016：49-118]。これらは、牧畜民が家畜を制御対象やモノとして見るのではなく、ある種の他者としてその存在を尊重して相互交渉するとともに、個体識別して個性を認め、家畜との共生を基盤とした世界観を発達させてきたことを示すものである。このような個別性に立脚する家畜観・価値観は、家畜を等価交換の対象とする市場経済や、数量化して分業の対象とする産業の論理とは相いれない。しかし、現実の世界には貨幣経済が浸透し、牧畜諸地域は「近代化」「社会主義化」「開発」「移行」といった国家政策や国際的プロジェクトの影響を受けて変容してきた。

そのような国家経済との関係について、ハンフリーらはポスト社会主義（ないしは改革開放）の経験を有する「内陸アジア」（旧ソ連・モンゴル・中国）の牧畜地域を対象として、牧畜民がどのように国家や外部の経済体制に対応してきたのかを議論してきた [Humphrey and Sneath 1999]。その中でスニースは、牧民の移動距離と頻度に関する1930年代のA・D・シムコフのデータに依拠して、社会主義期以前のモンゴルには「生業的模式」と「利益追求モード」と呼べる2つの理念的な極が併存していることを指摘した。生業的模式は多様な家畜を飼育して多様な畜産物を生産・加工することで自給に供することを、利益追求モードは飼育する家畜種を単一化して頭数を増やすことにより利益の増大を図るものである。ただし、別のモードを主戦略とする世帯が同時代に同一地域に共存していたし、利益追求モードを主とする世帯も自家消費用の畜産物を自家生産していた [Sneath 1999：225-226]。スニースの功績は、どちらのモードをも例外とせず、併存という図式を提示した点にある。では、このような二元的な価値のもとで、モンゴルの牧民はどのように論理を使い分けてきたのだろうか。

スニースの論攷に刺激を受けて、モンゴルの牧畜社会における価値の二重性あるいは生業と産業の関係についての研究関心が高まった。人間と家畜との関係については、とくに社会主義のもとでは家畜は強く数量化されたが、一部の個体は個別化され、母系の系譜が認識されていたことが明らかにされた [風戸 2009：201-218]。乳製品は、社会主義期にも市場経済化後も、自家消費（や贈与）と商品生産の2つの領域で用いられてきたことがわかった [尾崎、森永 2016；富田 2016]。このように、社会主義期以降にも生業と産業が共時的に併存してきたことが実証されてきたのである。毛に関しては、1950年頃まで牧民は自家生産した羊毛でゲル（移動式住居）の壁や屋根となるフェルトを自作していた。ところが、フェルトの工業生産が強化されて国営工場が羊毛全量を買取り始めると、フェルトの自家生産が中断された [Myagmar 2006：53]。市場経済化後には牧民による自家生産が再開されたが、2010年以降は再び工業製品の生産量が伸びている [風戸 2016]。このように、通時的な観点からは生業と生産の比重には変動があることも示された。

以上では、生業と産業を分析的に対立させ、産業を工業的な経済活動、生業を文化要素を多分に含む総合的な活動と定義した上で、現実の世界では生業と産業が併存していることを示してきた。産業化は歴史的过程であるので、生業と産業の間にはさまざまな段階がある。松井は、「生業と生産という二つの次元は、ねじれて接合されている。ある位相では生業は生産を包摂している」 [松井 2011：3-6] と述べる。松井のいう「生産」は商品化と言いかえることができると考えられるが、松井の示唆するところは、社会的な活動である生業が、その中の経済的な活動部分である生産を包摂しているということである。牧畜についていえば、生業がメインの地域に産業がしのびこんでいるということであるが、モンゴルを事例とした先行研究は、その逆の、産業がメインの地域にも生業がみられるという事実をも示してきたのである。

既存研究が事例とした畜産物は国家経済の中でも価値が高いモノであった。これに対して本論は、畜糞という周辺の畜産物を事例として、畜産物と人間、畜産物と家畜の関係を分析し、モンゴル

牧畜の生業性ないしは牧畜文化らしさを検討する。加えて、従来の「人間と家畜の関係行動」の「人間」は主に放牧に従事する「男性」であったが、本論は主に女性が生産、利用するモノである畜糞に注目することで、女性の視点からの牧畜文化論をもめざす。

2 畜糞研究一般

本節では畜糞に関する先行研究を、世界の畜糞利用、モンゴルの畜糞利用、の順に検討していく。畜糞は家畜を飼えば必ず排出されるので、畜産業がおこなわれている産業社会をはじめとして、農牧複合社会、農耕のための役畜を飼育している地域、そして牧畜社会にあまねく存在する。

産業社会の畜産業では畜糞は長く、地下水汚染や悪臭発生などの環境問題の発生源とみなされてきた。しかしながら、近年の循環型社会への移行にともなって、畜糞の利用促進も図られている。日本の「家畜排せつ物法」（1999年）は、畜糞の「野積み」や「素堀貯留」を禁止すると同時に、畜糞を堆肥化处理して肥料等として使用することを奨励している。2002年には国家主導のバイオマス利用促進プロジェクトが始まり、畜糞は太陽光や風力に次ぐ再生可能エネルギー源と位置づけられ、牛糞・鶏糞の発酵メタンガスによる発電・発熱施設が各地に設置された〔経済産業省・資源エネルギー庁 2016〕。

農牧複合社会や役畜を飼育している農耕社会に目を向けると、農耕が可能な地域は降水量が比較的多い。畜糞は降水や湿度により分散したり、腐敗したりしやすい。このため、湿潤地域で畜糞を利用する場合は、堆肥化、つまり微生物によって発酵させる過程を経て、肥料として多く使われてきた。

乾燥地の牧畜社会ではどうだろうか。牧畜が営まれるような乾燥地は概して植生に乏しく、薪炭材が少ない。そこで人間が火を使って生活するために、薪に代わるバイオ燃料として、乾燥した畜糞が炊事や暖房に利用されてきた。その例が、チベット〔稲村 2009〕、アンデス〔山本 2014〕、モンゴル〔吉田 1982；包 2014, 2015〕をはじめ、世界各地から報告されている。畜糞は建築資材としても利用されてきた。モンゴルでは、畜糞の塊をブロックのように積み重ねて家畜囲いを作る

〔バトゥール他 2010〕。その内部の床にはヒツジ・ヤギの乾燥糞を敷き詰め、これが柔らかな保温マットの役割を果たす〔風戸 2009：180-182；バトゥール他 2010〕。家畜を中心的な財とする牧畜社会ならではの畜糞の位置づけとしては、象徴的な領域との結びつきが重要であろう。儀礼を含む多角的な畜糞利用のあり方が、インド〔小磯 2015〕やモンゴル〔包 2014〕から報告されている。カザフスタンのカザフ人も、乳児の通過儀礼にヒツジの糞を用いていた（筆者による2014年聞き取り）。また、牧畜社会には農耕を補足的に取り入れている地域も多く、アンデスをはじめとして各地で畜糞は肥料としても利用されてきた〔山本 1997〕。

このように、産業社会では近年まで廃棄物とみなされてきた畜糞が、牧畜社会では燃料をはじめ多目的に利用されていた。畜糞は牧畜社会においてはりっぱな畜産物なのである。

3 モンゴル畜糞研究

本節では、モンゴルにおける畜糞利用に関する先行研究をレビューする。既存研究は、畜糞を歴史・象徴系・家畜管理・生活道具・生態系との関係で個別に論じているが、そこから、生業と産業あるいは自家消費と商品生産の関係について議論しているものはない。生業と産業の併存を論じるのにモンゴル地域を事例とする理由を再確認しておく、モンゴルは、社会主義化と市場経済化の二重の産業化を経験しているのに、家畜が個別化されるなど、商品からこぼれ落ちるものがあることがわかっている地域だということである〔風戸 2009：196-234〕。対象としての畜糞は、経済価値が低い畜産物として選んだ。

畜糞利用の歴史については、吉田が、13～19世紀にモンゴルを訪れた外国人研究者・旅行者の記録をまとめて、当時からモンゴル人が家畜の糞を燃料等として用いていたことを指摘している〔吉田 1982：64-67, 73〕。たとえば、13世紀にはプラノ＝カルピニがモンゴル帝国の首都カラコルム（現在のハラホリン）を訪れ、19世紀にはG・ポターニンやN・プルジェヴァリスキーがモンゴル地域を広く調査したが、カルピニの報告書には、モンゴル人が「牛馬の糞を燃やした火で食物を料理」することが驚きをもって記されている

[プラノ=カルピニ 2016:24]。プルジェヴァリスキーは、モンゴル人の不潔さの例として、茶を沸かすやかんを洗うことなくたまに内側を乾燥牛糞でこすると書いている [プルジェヴァリスキー 1981 (1875):65-66]。このように、外国人は畜糞を汚いと感じることがあったが、モンゴル人は畜糞を不潔とは考えていないようで、燃料をはじめとする多くの用途に畜糞を用いてきた [吉田 1982:64-67, 73]。

清代 (1644~1912年) には、領主「ノヨン」が領民に「アルバ (賦役・貢納)」と呼ばれる現物税として畜糞の貢納を課し、とくに砂漠性草原のゴビ地域では重い負担となっていた [吉田 1982:64-67, 73]。畜糞は徴税手段として権力によって掌握されていたといえる。その後の社会主義政府も畜糞に関心を示していた。吉田は当時の文献資料に依拠して、1964~1968年にモンゴル全国でおこなわれた畜糞の調査の概要を記している。調査は、畜糞の排泄量や燃料として使用しうる畜糞量を調べた上で、モンゴルの五畜 (ウシ・ウマ・ヒツジ・ヤギ・ラクダ) の年間総排泄糞量を計上している [吉田 1982:64-66, 86]。このように、社会主義期には国策として畜糞の調査がおこなわれ、燃料としての潜在的可能性が探査された。

一方、象徴系における利用については、包がその多くを解明してきた。まず、認識人類学的な名称体系の研究がある。包は中国・内モンゴルのシリンドル地域でおこなった調査にもとづき、現地の牧民が五畜の糞を、家畜種、状態 (湿潤・乾燥・粉状)、排泄された季節および排泄後の経過時間、色などにより20種類以上に分類していることを示した [包 2015]。また、ことわざ・なぞなぞ・詩歌などのフォークロアにみられる畜糞イメージを分析し、微細に分類された各畜糞の性質を牧民が熟知していることや [包 2014:195-202]、遺失家畜を探し出すためのト占の道具としても用いられていることから、畜糞がモンゴル人の世界観に埋めこまれていることを示唆している [包 2014:209-213]。

家畜管理場面での利用について筆者は、ヒツジ・ヤギの糞が寝床に堆積し、踏み固められ、そこに落ちる獣毛に尿がついたものを人間が除去することで乾燥状態が維持されている土壌が「ブーツ (buuts)」と呼ばれること、これが家畜の冬越

しに必須の物質であることを報告してきた [風戸 2009:180-182]。モンゴルではヒツジとヤギが混成群として放牧され、一緒の家畜囲いに入れられるが、ヤギは寒さに弱い。ブーツには保温性があり、厳冬期の夜間にヤギが体温を維持して眠るのに不可欠な寝床マットとして機能している。家畜囲いは実はブーツを風雪から保護する役割も果たし、囲いを整備・補修してブーツを守ることが、数年に一度襲う予期できない雪冷害「ゾド」から家畜を守る手段になっている [バトゥール他 2010:76-77]。また、畜糞は放牧中の家畜の行動をコントロールする道具としても利用されていた。日帰り放牧では、家畜の移動ルートと時間配分を牧民がコントロールするが、牧民は地面に落ちていた畜糞を拾って、速度や進行方向の不適切な個体に投げつけることで、その行動を変更させていた [風戸 2009:114]。

人間の生活道具としては、畜糞の機能は第一に燃料であるといえよう。包は、家畜種や畜糞が排泄された季節と、火力・火持ちなどを比較するとともに、調理する肉や乳の加工工程との対応に注目している [包 2014:172-177]。加えて、畜糞は人間の病気・けがの治療にも使われる [包 2014:188-194]。

最後に、草地生態系に対する家畜排泄物による肥沃化については相反する2つの見方が示されている。1つめは、家畜の採草で奪われたバイオマスの約3分の2が、気温・降水量等の変動にかかわらず、畜糞により肥沃化されて回復するという肯定説である [立入、篠田 2013]。他方、とくに乾燥の強い地域では、畜糞に含まれる高濃度塩類が土壌中の微生物活性を低下させてしまうという否定説も提示されている [近藤、廣部 2013]。

このようにモンゴルの畜糞については厚い研究蓄積があるが、これがモンゴルの生業性や産業性にどのように関わるのかは論じられてこなかった。

4 本論の視座

本論は、産業化の度合いが低い畜産物である畜糞に注目し、その利用方法をミクロに記述することを通して、畜糞利用の生業性にみられるモンゴルの特徴を提示するとともに、産業社会であるモンゴル国の牧畜に生業の要素がどのように埋めこまれているのかを議論していく。市場経済化後

のモンゴルは、銅・石炭・金などの鉱物資源とともに肉・毛・皮革などの畜産物を輸出してきた。これに対して畜糞は、自家消費と狭い範囲での流通はなされてきたものの、国家統計年鑑に産出量や輸出量が掲載されておらず、国家経済の中で周縁的な位置にあるといえ、畜産物の中でもとりわけ生業を論じるにふさわしいモノである。また、畜糞は女性の管轄下にあるモノであることから、牧畜文化論に女性の視点を付与することができるだろう。

本論の依拠するデータは、1997～2016年の19年間に、モンゴルの3つの植生帯に分布する6つの県で得られたものである。具体的には、森林性草原地域のアルハンガイ県チョロート郡（1997～1999年）、ザブハン県テルメン郡（2003、2004年）、ボルガン県ボガト郡（2016年）、草原地域のドルノト県バヤンドン郡（2003年）、ホブド県ドート郡（2012年）、砂漠性草原地域のドンドゴビ県デレン郡（2001、2003年）、ザブハン県エルデネハイルハン郡（2003年）、ウムヌゴビ県ハン・ホンゴル郡（2011年）、である。調査地の地図を図1に示した。以下では各調査地を、たとえば「アルハンガイ県チョロート郡」であれば「チョロート郡」と郡名で呼ぶ。調査方法としては、地域差を考慮しながら、畜糞と人間の関係および、畜糞の取り扱い方の多様性を記述した。

Ⅲ 畜糞利用の多様性

本章では畜糞のさまざまな利用方法を示す。最初に、畜糞というモノに対する認識の言語による体系化として名称体系を扱う。次に畜糞の利用方法として、利用頻度の高い、燃料・建材・家畜管

理および畜産物加工の道具としての用法を示し、その後に利用のバラエティーを補足する。

1 名称体系

畜糞名称について、梅棹 [小長谷 2014 : 330-331]、吉田 [1982 : 69-72]、包 [2015 : 33-41] の記述と筆者の調査結果を対照した (表1)。畜糞の名称はその状態と家畜種によって異なる。状態は、排泄後まもなく、乾燥した状態、燃料として用いる時、の3つに分けられる。排泄後まもない糞はみな「バース (*baas*)」と呼ばれることが多いが、粒状の糞であるヒツジ・ヤギ・ラクダの糞は「ホルゴル (*horgol*)」とも呼ばれる。乾燥した状態では、ウシの糞は「アルガル (*argal*)」、ウマの糞は「ホモール (*homool*)」、ヒツジ・ヤギ・ラクダの糞はホルゴルと区別される。ホルゴルは「～のホルゴル」と家畜の種類をつけて呼ばれることもある。燃料として用いられる時にも、ウシとウマの糞は乾燥状態のものと同じアルガル、ホモールという名称で呼ばれる。しかし、ヒツジ・ヤギの糞は排泄されたままの粒の状態で燃料として使用されることはなく、家畜に踏みつけられて固められた後にこれをブロック状に割り出して使用され、これは「フルズン (*horzon*)」などと呼ばれる。以下、燃料としてのウシの糞のことをアルガルと呼ぶ。

名称体系は、1940年代の内モンゴル (中国)、1980年代のモンゴル人民共和国 (現在のモンゴル国)、2000年代頃のモンゴル国、2010年代の内モンゴルには、時代・地域による大きな差異はなく、モンゴルの人びとの間では国家の政治・経済体制にあまり影響されずに畜糞に対する認識が持続し

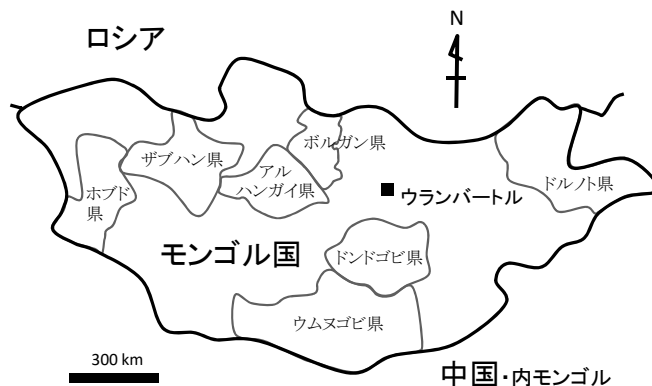


図1 調査地の地図

表1 畜糞名称

家畜種	排泄後まもなく			乾燥した状態			燃料として			
	梅棹	吉田	包	吉田	包	風戸	梅棹	吉田	包	風戸
ウシ	バース	バース	バース	アルガル	アルガル	アルガル	アルガリ	アルガル	アルガル	アルガル
ウマ	バース	ホモール	バース	ホモール	ホモール	(アトニー・) ホモール	ホモール	ホモール	ホモール	ホモール
ヒツジ	バース	ホルゴル	バース/ ホルゴル	ホルゴル	ホルゴル	(ホニニー・) ホルゴル	フルチン	フルズン	フルジン	フルズン
ヤギ	バース	ホルゴル	バース/ ホルゴル	ホルゴル	ホルゴル	(ヤマニー・) ホルゴル	フルチン	フルズン	フルジン	フルズン
ラクダ	バース	ホルゴル	バース/ ホルゴル	ホルゴル	ホルゴル/ アルガル*	(テメニー・) ホルゴル	テメーネイ ホルゴル	ホルゴル	アルガルか	アルガリか

出典：小長谷 [2014：330-331]、吉田 [1982：69-72]、包 [2015：33-41] をもとに風戸作成。

*粒状のものはホルゴル、塊状のものはアルガルとよばれる。

てきたことがうかがわれる。

2 燃料としての畜糞

(1) 畜糞燃料の性能

上述したすべての畜糞に共通する用途は燃料である。牧畜地域での畜糞以外の燃料として、森林の発達している地域では薪が使われ、近年ではボンベやカセットを用いるガスコンロも普及している。テルメン郡やボガト郡のような森林草原地域ではひとつの世帯が薪と畜糞を併用していることが多いが、モンゴルの植生はパッチ状に分布しているため、1年間に消費される薪と畜糞の割合は行政区（郡の下位の行政単位）ごとに異なるといってよい。使用する燃料の選択には、生態環境の他に、乳製品加工に関わる民俗知識や、世帯の経営戦略、そして世帯内労働力が影響する。

乳製品加工との関係では、畜糞燃料はその性能ゆえに需要がある。テルメン郡のMM（女性、2004年聞き取り）は、「アルガルは乳製品の加工に適し、アルガルで乳を熱するとウルム（クロテットクリーム）が厚くなる。薪も併用していて、料理の時には早くできるので便利だ」と語った。乳から乳脂肪を析出させるプロセスでは長時間低温で加熱するのがよく、畜糞の中でもとくにアルガルの「やわらかい火力」が最適であるという。牧民は各燃料の特徴を見極めて、目的に応じて使い分けていた。

次に世帯の経営戦略について述べる。ボガト郡で畜糞・薪・カセットコンロの3つを併用しているTS（女性、2016年聞き取り）も、ウルムを取るプロセスにおいて、搾りたての乳を大鍋で加熱し

ながら杓子で泡立てる工程では薪の強い火で熱し、「乳の表面が泡の層で覆われた後にはアルガルのやわらかい火で温めて」脂肪分を析出させるのがよいと話した。彼女の燃料箱には薪とアルガルの両方が入っていた。しかし、畜糞は薪よりもずっと多く灰が出るので、頻繁にストーブの蓋を開けて灰を出し、ゲルから遠く離れたゴミ捨て場に運んで捨てなければならぬ。灰捨ては忙しい時には手間であり、風が強い日には灰まみれになるつらい作業である。このため、実際には、「アルガルはあまり使わない」とも言った。TSの世帯は馬乳酒と肉用牛の生産に力を入れている商品経済志向の経営体であり、馬乳酒生産を夏から秋の主要業務と位置づけていた。具体的には、1年間（夏から秋）に4.5tもの馬乳酒を生産し、そのうち1.5tを地下倉庫に保存して価格が上がるのを待ち、2月頃の旧正月の祝いの飲み物として販売していた。そのためウマの搾乳期には、馬乳酒以外の乳製品加工に時間やエネルギーを割けないので、理念的には牛乳の乳脂肪分離工程はアルガルで加熱するのがよいと語ったものの、実際には灰が多く出るアルガルを避けて薪で加熱していたのである。

このように、地域に根ざした自然資源や家畜の排泄物を利用したバイオ燃料にはクセがあり、それを扱う知識・技能が必要である。だからといって、モンゴル人は昔ながらの燃料利用の知恵と畜産物の品質の保持にしばられているわけではない。かまどの世話をする女性たちは、アルガルよりも薪やガスを選好する場合もあった。世帯ごとの経営規模や経営戦略によって、労働・時間・コストを勘案してその時々最適な燃料が選択され、使

用されているのである。

畜糞の火力については、梅棹はラクダの糞が一番よく燃え、次にヒツジ・ヤギの糞がよいと述べているが〔小長谷 2014 : 328〕、吉田は火力が強い順にヒツジ・ヤギ、ウシ、ラクダ、ウマの糞〔吉田 1982 : 74-77〕、包はヒツジ・ヤギ、ウシ・ラクダ、ウマという順位をつけている〔包 2014 : 173〕。このように意見が分かれた理由は、五畜の糞をまんべんなく得られる地域は少なく、牧民は地域ごとのメジャーな家畜の糞を使っているため、身近な畜糞の用法には習熟して使いやすいと価値づけるからではないかと考えられる。実際、吉田と包が最下位に位置づけたウマの糞は、筆者の調査したハン・ホンゴル郡（砂漠性草原地域）では重用されていた。包は燃料の特性として、火力に加え、火持ちと着火性に注目した〔包 2014 : 172-174〕。たとえば火力と火持ちは、家畜の種類よりも糞が排泄された季節に規定され、糞の色味で区別されていた〔包 2014 : 172〕。最適な燃料は、使用目的、つまり暖房なのか、調理なのか、乳加工であればどの工程なのかによって決まり、合目的的に選ばれ、使い分けられていた。

（2）畜糞燃料の生産

畜糞の中でもアルガルの採集は、落ちてくるものを拾うギャザリングにとどまらず、排泄されたばかりの糞「バース」に加工を施して乾燥畜糞「アルガル」を作りあげ、これを回収することが多い。このような加工プロセスを考慮すると、アルガルは採集物よりも収穫物に近いといえるだろう。アルガル採集は主に女性の仕事である。その工程を詳しくみてみよう。ドート郡やボガト郡の女性たちは、毎日朝と晩にキャンプ内の仔ウシ囲いの周囲で雌ウシの搾乳をしながら、搾乳場所に集まっているウシやヤクたちが糞を落とすエリアを目視で確認する。糞の表面が少し乾いた時点で、ウシが踏まない場所に集め、重ならないように広げて糞を干す。片面が乾いたら、裏返して裏面も乾燥させていた。一方、テルメン郡の女性たちはウシの搾乳後に、仔ウシを繋ぐ革製ロープの周囲の牛糞を数カ所に集めてから、糞の山を分割したり、平らに押し広げて刻み目をつけたりして乾かした。翌日、これを裏返し、後日、完全に乾いたものを集めていた。

このようにバースは、女性たちの労働投下によって、家畜に踏みつけられて粉碎されることのない場所に移動され、短時間で両面が乾燥するよう裏返されることで、アルガルに加工されていた。アルガルは砕けてしまうと使いにくいので、一定以上の大きさを保つように注意深く成形されていた。また、干している最中に雨が降ると溶けてしまうけれども、完全に乾燥していないと燃料として使えないことから、短期間で乾燥させることがキーとなる。キャンプから離れた放牧地に落とされた畜糞に対する介入の程度は下がるが、大人たちは家畜を追いに行く時などに足下に半乾きの牛糞をみつければ、さっとかがんで牛糞を裏返していた。乾燥した牛糞は、テルメン郡ではヤナギの枝を曲げて作られた背中に背負う「採集かご」に、ボガト郡では小麦粉50kgが入っていたポリプロピレンの織りの袋に収穫されてキャンプに持ち帰られ、キャンプ内の畜糞置き場で保管される。畜糞はかさ高くあるいは簡単に集められ、雨の多い時期には帆布や家畜の皮などで覆われて風雨による劣化から保護されていた。

畜糞には明確な所有権はないものの、他者がほゞ毎年キャンプしている場所の周りで勝手に畜糞を採ることは避けられている。とくに家畜囲いのある冬営地や春営地は、その家畜囲いに法的な占有権を持つ者が、初秋に干し草の備蓄と囲いの整備をおこなうとともに、畜糞を採集・集積をすることが一般的なので、他者がそこで畜糞を採ることは抑制される。冬に燃料が不足すれば命取りになるからである。このことから、ある世帯が確保できる畜糞の量は、第一に、その世帯が所有する大家畜の頭数に規定される。第二に労働力や勤勉さが関与する。テルメン郡の牧民によれば（2003年聞き取り）、「森林草原地域では男性たちが数日ごとに森に薪取りに行く。砂漠性草原地域では女性が1人で自分のウシが排泄したアルガルを集める」という。燃料調達は、森林性草原地域では男性が薪で補うことができるが、砂漠性草原地域では女性の労働にかかっているのである。家畜頭数や労働力の少ない世帯では、調理のためには燃料を燃やしても、暖房だけのために燃料を消費することが少なく、ゲルの室温は低い。

(3) 畜糞燃料の季節性

畜糞の性能には、家畜が食べる食草と排泄後の気象条件により季節性がみられる。たとえばウシの糞について包は次のように、名称・性能・用途を区別している。すなわち、春（2～4月頃）にできた乾燥牛糞は「黒アルガル」と呼ばれて火力が強いので肉料理に、夏（5～7月頃）・秋（8～10月頃）にできる「黄アルガル」の火力は普通でチーズなどの加工に、1年以上経ってよく乾燥した「青アルガル」も火力が強いのでミルク茶を沸かす時に、冬（11～1月頃）に排泄されて凍った牛糞が翌春に乾いた「ウムグ・アルガル」は柔らかく粉状態になりやすいが着火剤として優れている [包 2014 : 173-176]。他方で、有用性が低く、使用頻度が少ない畜糞についても、排泄された季節や排泄後の経過、色味により区別されて名称がつけられ、燃料としての使いにくさも仔細に認識されており、初夏に排泄された糞が一番よくない [包 2014 : 155-172]。以上から、アルガル採集の適期は春と秋で、夏と冬はよくないといえるのであるが、夏には排泄物を糞虫がすぐに分解するのでエネルギーが減り [包 2014 : 161]、冬は低温のために畜糞が乾燥より先に冷凍されて内部が十分に乾きにくいためだろう。夏の糞虫対策としては、人間が畜糞に加工を加えることで糞虫に分解される前に乾燥させる工夫がなされていた。大きなものは乾きやすいように分割し、表面が乾いたら裏返して、迅速に内部まで乾燥させるのである。このような夏季特有の畜糞加工法は1940年代の内モンゴルでも観察されていた [小長谷 2014 : 329]。

夏が過ぎ、秋になると畜糞備蓄の季節が始まる。畜糞は厳しい冬・春を迎えるのに不可欠な物資である。畜糞備蓄をはじめとする冬支度は牧畜経営の要であり、国家の重要産業の支えとなる。このため、畜糞備蓄に関しては各世帯の自助努力に加えて、行政による指導がおこなわれている。具体的には、デレン郡第1行政区の長は、2001年7月25日に「家畜を健康な状態で年越しさせる」ため、家畜の寝床用のポーツ（1t）とともに人間の燃料用のアルガルとフルズンなどを9月15日までに採集・保存するよう告知を出し、確認のための家庭訪問を予定していた。

ここまで、乾燥牛糞であるアルガル中心に論じ

てきたが、アルガルは夏によく使われる。冬には冬営地に堆積したヒツジ・ヤギの糞「フルズン」をブロック状に割り出したものが多く使われる。ただし、国土面積が大きく、自然環境が多様なモンゴルでは、畜糞利用の季節性に関しても地域差が大きい。テルメン郡では（2003年聞き取り）、「冬はアルガルとフルズンを燃料として使う」という一般的な使い方を述べた後で、「ここでは、夏・秋・春には雨が降ったり雪が溶けたりするため、アルガルは濡れてばらばらになるので使えない。乾燥して気温が下がる冬にのみここではアルガルを使う」という特殊な事情を説明された。降水量が多く、森林が発達しているテルメン郡では、燃料の加工・採集のコストを総合的に判断して、春から秋には薪に依存し、冬だけに畜糞を使用しているものと考えられる。

(4) 畜糞燃料の商品化

牧畜を営む年長女性たちは、定住地で生活すると光熱費が多くかかるが、草原では「アルガルをお金で買うわけではなく」「無料のもので暮らしていてお金を使うことはない」（デレン郡のNM、女性、2003年聞き取り）と強調する。しかし、アルガルは牧畜地域から定住地に入ると交換価値を帯びる。清代にはアルガルは現物税として貢納されていたが、現代でも学校等の公共機関が牧民にアルガルの納入を指示することがある。デレン郡の10年制学校の寮では（2003年聞き取り）、寮生の給食予算に燃料の受益者負担を盛りこんでおり、それは「夏休みの宿題」として子どもにアルガルの採集と供出を求めるものであった（1～4年生は50kgの小麦粉袋2つ分、5～10年生は3つ分）。

ドート郡の中心地（定住地）に住むCn（男性、2012年観察）は、ヒツジ・ヤギ・ウマを草原の知人に預託していたが、ウシを所有していなかった。そこで、草原でウシを飼育している親しいBb家を夫婦で訪れ、牧畜作業を半日ほど手伝う代わりに、Bb家の周りでアルガルを採集させてもらった。当時、アルガルは、ロシア製69型ジープ1台の車内に満載した量が取引単位となっていて、これがドート郡の中心地では6万トゥグルク（約3,600円）、ホブド県の中心地では8万トゥグルクと高価であったため、Cnは労働と交換で採集しなかったという。才覚と労働力のある牧民はアルガ

ルを採集しては郡や県の中心地に運び、販売していた。Jg（男性、2012年聞き取り）は、夏に放牧地としていた場所のアルガルを、秋になってから自動車で行って採集し、県の中心地で売った。69型ジープ1台分のアルガルの価格は2010年以降、値上がりしており、ガソリン代を差し引いても2012年にはジープ1台分のアルガルの利益は5万トウグルクになった。先述したとおり、秋は誰もが冬支度としてアルガルを備蓄するシーズンであり、ドート郡では2012年の秋に90万トウグルク（約54,000円）をアルガルの販売によって得た者もいるという。アルガルの販売は1940年代の内モンゴルでも見られた。梅棹の資料には、多くの牧民がアルガルを町（日本軍の出張所や購買組合）に売りに行き、アルガルの値段は冬が深まるとともに上がることや〔小長谷 2014：160, 328〕、家畜の飼料となる乾し草とアルガルが同容量で等価交換されていたこと〔小長谷 2014：166〕が記されている。

アルガルは古くからの換金畜産物であるが、注意したいことは、牧民個人が自家用車で運搬・販売し、日帰りできる範囲でのみ流通する弱い商品であるという点である。流通システムも未整備である。畜糞の資源化プロセスには、自家消費用であっても労力がかかるが、販売するためにはまとまった量のアルガルを採集し、これを荷造り、運搬した上で、マーケットで売却する取引費用がかかる。量としては、最低でもジープ1台の座席を外した空間を埋め尽くす量のアルガルを採集しなければならない。大口の買い手は幼稚園などの公共機関であり、牧民は親戚や知人のコネクションを活用して関係者にアクセスし、携帯電話で交渉し、自ら納品する。アルガルの商品化は、家畜頭数が多く、大きめの自家用車も所有していて、さらなる現金稼得のために労働投下を惜しまない「利益追求モード」の牧民の努力と才覚によって実現するものであり、家畜頭数が少なく自動車も持たない「生業的モード」の牧民には縁遠いチャンネルなのである。

3 家畜囲いとその寝床マットとしての畜糞

(1) 建材

冬営地には人間と家畜の冬越し用に構造物一式が建てられている。その呼び方は地域によって異

なるが、ハン・ホンゴル郡では「ボーツ」もしくは「ウブルジュ」と呼ばれていた（2011年）。冬営地の構造物の中で最も重要なのが家畜囲いである。家畜囲いは、家畜を夜に眠らせたり、家畜の世話をするときに一時的に収容したりする施設である。牧民のキャンプには一般的に複数の家畜囲いがあり、囲いの大きさ・数・形状は、家畜の頭数、群れの分割のしかた、居住集団の人間関係などにより多様である。形状も、簡易な移動式木柵から、これを牛糞で塗り固めた壁と屋根とを備えた固定的な構造物までさまざまである。

構造物の主な建材は、木・石・フルズンである。フルズンは、家畜囲いの中でヒツジ・ヤギの糞が固まって厚く層をなしたものであるが、フルズンをシャベルなどで割り起こして板状のブロックを作り、これを組み合わせて壁状に積み重ねることで囲いが作られる。ただ、フルズンによる構造物は風雨を受けて劣化するため、毎年秋に家族総出で補修がおこなわれる。新しいフルズンが割り出され、囲いの減った部分を補うように積み重ねられる。毎日の使用においても、家畜が囲いを強く押したり、乗り越えようとしたことが繰り返されると囲いは部分的に崩れる。

家畜囲いの部分的な補修や補強にはウシのバースが塗り壁剤として用いられる。チョロト郡の女性たちは冬（1997～1999年）、ウシを搾乳した後に、搾乳中に排泄されたバースを家畜囲いのすきまに塗り込んだり、囲いの上部に塗り重ねて高くしていた。バースで家畜囲いを塗り固めると、すきま風を防いで保温性を高めることができる。

なお、モンゴル高原では古くから畜糞、とくにヒツジ・ヤギの糞が建築に利用されてきた。たとえば、8世紀にウイグル帝国の歴代可汗（皇帝）が築いた都城（首都）遺跡である「バイ・バリク（ビー・ボラク）」や「ハル・バルガス（オールドウ・バリク）」の工法についてはこれまで「版築」（土を主な建材とする）とされてきたが〔林 1999：308-312〕、筆者が1998年にハル・バルガスを観察したところ、その建築物の壁にはヒツジ・ヤギの糞が使われていた²⁾。また、現代インドでも、民家の土間やかまどは土に牛糞と尿を混ぜたもので構築されている〔遠藤 2015〕。

(2) 家畜の寝床マットとしてのポーツ

家畜囲いの中のヒツジ・ヤギの糞が踏み固められると、下層部分は上述した固いフルズンとなり、表層がやわらかい粉末状のポーツとなる。ポーツはヒツジ・ヤギの冬季の寝床マットとして機能する。ここでは主に、テルメン郡のTs(男性、2004年聞き取り)の語りによって、ポーツの生成、特徴、維持、価値について順に述べていく。

ポーツの生成については、Tsによると、「ポーツができるまでには、普通の場所に家畜を連れて人が来て50年も100年もキャンプすると、家畜の糞が時間とともに変化する。色が黒くなり、灰色になり、そしてウトック(*otog*)になる。家畜囲いを建てると糞が留まってウトックになる」という。なお、ウトックの意味は第一義的に「畜糞が砕かれて粉状になったもの」[Mongol Ulsyn Eronhiilogchiin Tamgyn Gazar 2016]であるが、「fertilizer(堆肥)」「muck(肥料)」といった含意もある[Bolorsoft LLC 2016]。「ウトック・ポーツ」という連語があり、「1. ヒツジ・ヤギの寝床にたまった畜糞の粉碎物」「2. それらが残っている遊牧世帯のキャンプの跡地」を意味する[Mongol Ulsyn Eronhiilogchiin Tamgyn Gazar 2016]。筆者の観察では、冬営地全体をポーツと呼ぶ地域(デレン郡、2003年聞き取り)があった。その一方で、ポーツは粉末化した畜糞、ウトックやウトック・ポーツは粉末化した畜糞が発酵や堆肥化の過程を経て保温性をもつもの、として区別する地域(テルメン郡、2004年聞き取り)もあった。ただし、後者においてもウトック・ポーツは単にポーツと呼ばれることが多かった。

次に、ポーツの特徴を検討する。「ポーツは表面が積雪や家畜の尿で凍っても、少し掘ると真っ黒なウトックが出て、何メートル掘っても出てくる。表面が凍っても中は凍ることのない黒々したポーツは、家畜用の敷きパッドのようなものである。「ヒツジ・ヤギは厳冬期、とくにゾドの時に『白い場所(*tsagaan gazar*)』に座りこんで眠ると足が凍傷になり、[蹄で雪面を掘っておこなう]採食に差し支える」といわれるが、ポーツは冬だけに必要とされる季節用品である。ポーツの対義語とされる「白い場所」は、表面にポーツがない普通の土壌の場所を指す。そのことをテルメン郡のDn(男性、2004年聞き取り)は、「ヒツジの出

産期にはポーツがなければならぬ。仔ヒツジはポーツのない場所に寝そべると死んでしまう」、「しかし暖かくなるとヒツジたちは自らポーツがある場所を避けて、その周辺に座り込むようになる。そうしたら、暑がっているなと思って『白い場所』、つまり涼しい場所へ引っ越してやる」と説明する。

ポーツの維持については、エルデネハイルハン郡の牧民によると(2003年聞き取り)「冬営地を2~3年使わないとポーツがなくなり、冬営地でなくなる」ということであるし、テルメン郡のTsもやはり、「ポーツは守らないと消失する。夏の雨風でなくなる。家畜囲いで守るとウトックを維持できるが、10年以上キャンプしないとなくなる」と語る。このように、ポーツを維持するためには、毎年これを冬営地として使用すること、そのために家畜囲いを整備したり、ポーツ上層部を割り起こして除去し、地下10cmほどの層を乾燥させるといった作業が必要である。

最後にポーツの価値について述べる。Tsによれば、「ポーツを生み出したのは祖先で、祖先から受け継いだもの。社会主義期には多くの家畜囲いが建てられ、新しい冬営地が作られたが、実はその大半は昔からポーツがあった場所だった」。冬営地には家畜囲いとポーツが必須であるが、囲いは作れても、ポーツを一朝一夕に作ることはできない。人間に連れられた家畜群が数年間にわたって同じ場所にキャンプし、そこに体積した畜糞が加工、熟成されてできた土壌がポーツなのである。つまり、ポーツは歴史的価値を有する[風戸 2009: 182, 190]。そして、重要なこととして、「ポーツは、社会主義期にも、市場経済化期にも、社会化も私有化もされなかった」(Ts)という事実である。「市場経済化以降、冬営地の土地には占有権が確定され、家畜囲いの木材は売買されたが、ポーツだけはお金で買えないもの」とTsは語り、ポーツがプライスレスであることを示唆している。以上から、ポーツは、お金に換算できないが、牧畜を営む上で必要な物質であり、文化的な価値がきわめて高いモノなのである。

4 家畜管理および畜産物加工の道具

本節では、牧畜文化を議論する上でとくに重要な、家畜管理に関わる4項目(群れ管理・母仔管

理・虚弱な個体のケア・獣害対策）や畜産物加工に、畜糞がどのように利用されているのかを検討する。

(1) 家畜管理の道具

第一に、家畜群の放牧中の行動への介入（ハーディング）としては、1997年のチョロート郡での観察によると、一部の家畜が遅れたり、群れが牧民の意図と異なる方向に進んだりした時に、牧民はまず騎乗の状態の家畜に声をかけるが、それだけでは効果がないことが多かった。その時、牧民が下馬して、地面からウシ・ウマの乾いた糞を拾って行動に問題がある家畜に投げつけると、家畜を遠隔操作することができた。遅れた個体を群れに追いつかせる時には当該個体の背中や尻に畜糞を当て、群れ全体の方向転換を図る時には群れの前、つまり進行方向の先に畜糞を落とすと家畜はくると向きを変えた。牧民は家畜群に対して畜糞を投げつけるのに加え、石を投げる、音声を発する、棒を振り回す、腕を大きく広げて振りかざす、足で地面を踏みならすなどの行動を合わせて、群れの動き、すなわち進行方向と速度をコントロールしていた³⁾。

第二に、母仔の関係行動など個体への介入（ハズバンドリー）における畜糞利用である。仔畜に母乳を吸わせたくない時に、母畜（ヒツジ・ヤギ・ウシ）の乳首を新鮮なウシの糞で塗るかためると仔が哺乳しないという。たとえば、ヒツジ・ヤギは泌乳量の多い夏には、母畜と仔畜を別の群れに分けて放牧することで哺乳を抑制し、すべての母畜から搾乳をおこなう。しかし、秋になると群れを分けず乳量の多い一部の個体に糞塗りすることで個別に対応するのである。2011年のハン・ホンゴル郡では、牧民がウシの新鮮な糞を茶碗に入れて練り、これを親指と人差し指で母ヒツジと母ヤギの乳首に練りつけた。乾くと固まり、仔はその匂いを嫌がって哺乳しないということであった。しかし、成功率は高くなく、2012年8月のドート郡では10頭の母ヤギに糞塗りをしたが、5頭は仔に飲みほされてしまった。

第三に、虚弱な個体に対するケアのための畜糞利用である。春先に疲弊してやせ細った個体のために、秋のうちに畜糞を材料とした栄養補助飼料を作っておいて、与える。たとえば、秋にウマが

排泄した乾燥糞（*khartal homool*）を集め、ニラ科の植物ターナの汁や濃厚飼料を加えてクッキーのように整形し、乾燥させる。

畜糞は家畜の病気治療にも使われていた。1997年のチョロート郡では、ウマが立てなくなった時、ウシの新鮮な糞を鼻から吸わせると歩けるようになった。具体的には、郡の中心地まで片道40kmの行程を往復してきた去勢ウマが、キャンプに戻ってから立てなくなり、後ろ足から座りこみ、右腹から転がって背を地面にこすりつけた。足のケガではなさそうだった。Trはこのウマを「デルー（*deluu*）」、すなわち脾臓の病気と診断し、次のような治療を指示した。ウシの新鮮な糞をバケツに集めて水で溶き、これをウォッカのビンに入れてウマの右鼻の穴に差し込む。ウマはいやがったが、差し込まれると一気に720mlの牛糞液を吸い込んだ。その後、一人がウマの手綱を引き、他の人たちがウマを後ろから蹴ると、ゆっくりと歩き始めた。まったく立てなかったウマが、牛糞を吸ったら突然に立ち、蹴られながらも歩いたのは驚異であった。このように、モンゴルの獣医学では畜糞が治療薬として用いられ、劇的な効果を発揮していた。

第四に、家畜の群れを獣害から守るための畜糞利用について述べる。モンゴルの牧民と家畜にとっての日常的な最大の脅威はオオカミによる捕食である。これに対して、ヒツジ・ヤギの糞を集めて野外で焚いて煙を出すと、オオカミが近づかないという。

1997年夏～秋のチョロート郡では、多くの家畜がオオカミに食われていた。とくにウマの被害が大きかった。仔ウマは毎年、一世帯平均3頭ほどしか生まれなかったため、仔ウマが全滅する世帯も少なくなかった。また、ヒツジ・ヤギは夜にはキャンプ内の囲いに入れられていたが、オオカミが中に入ってヒツジなどを奪うことがあった。牧民は布団に入った後も眠らずに家畜とイヌの声に耳を澄ませ、異変があれば銃を持って飛び出し、イヌと共にオオカミと闘ったが、いつもオオカミが勝った。このような事態に直面して、チョロート郡の人びとはヒツジ・ヤギの糞を集めて燃やした。毎日、ヒツジ・ヤギの囲いから、糞に毛の混ざったものをかき出しては焚き火に足し、数日間燃やし続けた。チョロート郡を流れるハノイ川の

盆地は数日間にわたり、動物の糞と毛が焦げる強い臭いの白い煙で覆われた。この煙がオオカミの棲む山にとどくとオオカミは煙をいやがってほかの山へ移って行くと考えられていた。日が沈んでオオカミの遠吠えが聞こえると年長男性が、オオカミが嫌うという法螺貝のラッパ（仏具）を持って山に登って吹き鳴らし、他の男性たちも高く細く伸びる声を上げてオオカミに対抗した。

このように、オオカミの脅威に対抗するのはきわめて困難であり、人びとは物理的、呪術的な対応をおこなっていた。オオカミよけの糞焚きには、「ヒツジ泥棒にはヒツジの身体の焼臭で対抗する」というような類感呪術的な要素も含まれているといえるかもしれない。

(2) 畜産物加工の道具

畜糞が畜産物の加工に用いられるのは、燃料としてだけではない。ヒツジ・ヤギの糞「ポーツ」は発酵乳の保温に用いられる。馬乳酒は、木枠からつり下げられた巨大な牛革袋の中で発酵されるが、ドート郡（2012年観察）では、牛革袋と地面の間に布袋に入れたポーツを置いていた。「馬乳酒が温まって発酵する」という。保温効果に加えて、したたり落ちた馬乳酒を吸いとる役割も果たしていた。時々、太陽で乾かすという。包によれば、フルズンになったヒツジ・ヤギの糞も発酵熱を出す。馬乳酒、牛乳の蒸留酒、そして、そのもとなる発酵乳は、冬の寒さで凍結すると味が変わってしまう。しかし、容器ごとフルズンに埋めると一定の温度で保存することができ〔包 2014：181〕、品質を一定に保つことが可能になると考えられる。

畜産物加工に関わるさらなる機能として燻蒸が挙げられる。畜糞を燃やした煙で乳製品や肉の殺菌や香りづけをおこない、加工過程では煙が虫除けの働きをする。これは乾燥牛糞であるアルガルに顕著な用法である。馬乳酒は毎年、初夏に作り始められる。その最初に、馬乳酒を醸す容器をアルガルの煙で燻蒸する。容器を裏返してその中でアルガルを焚き、アルガルの煙を容器の中に焚きしめるのである。また、夏に家畜の肉を細く切って乾し肉にする時、その下でアルガルを焚くとハエ除けになり、ウジがわからないという。アルガルの煙の匂いがついた肉は「オタスン・マハ（燻製

した肉）」と呼ばれ、嗜好品的な位置づけがなされていた（ボガト郡、2016年）。

また、ヒツジ・ヤギの柔らかい糞は、天日乾燥中の乳製品「アール」をトンビから守るためにも用いられていた。アールは夏に生産して、乾燥させて冬用に保存する。これを専用の板に広げて天日乾燥するさい、ヒツジ・ヤギの生のホルゴルをマッチ棒に挿したものを複数本、アールに立てると害鳥除けになるという（チョロート郡、1997年）。

(3) 畜糞利用のバラエティー

最後に、畜糞利用のバラエティーを示す補足的な情報を挙げておく。ヒツジ・ヤギの乾燥糞は照明の道具としても用いられていた。21世紀のモンゴル国ではほぼすべての牧畜世帯にソーラーパネルによる発電システムが普及したが、前世紀にはろうそくで明かりをとっていた。ろうそくを切らした時、近くに商店がないと、畜糞を使った手作り灯明を作っていた。燭台にたまっているろうそくを剥がして、伏せた茶碗の糸引きに載せ、中心にヒツジかヤギの糞を一粒置いてマッチで火をとると、糞が芯になって周囲のろうを溶かして燃えた（チョロート郡、1998年）。

ヒツジ・ヤギのポーツは肥料にもなる。牧畜とならんで農耕・農業も盛んなバヤンドン郡では、郡の中心地でも草原でもジャガイモ栽培がおこなわれていたが、畑に家畜が入らないように柵で囲い、そこにポーツを運んできて施肥していた（2003年）。その他、包によれば、逸失した家畜を捜索するさいの行方を占う道具や〔包 2014：209-213〕、人間の病気・けがの治療にも畜糞は使用される。畜糞療法では、すべての家畜の、排泄されたばかりの糞・乾燥糞・屠殺した家畜の胃内容物・畜糞灰と煙が使われる〔包 2014：188-194〕。

本章では、畜糞の名称体系と、燃料・建材・家畜管理および加工の道具などとしての利用方法を記述することを通して、人間が畜糞に多面的に依存していることを示してきた。家畜の排泄物である畜糞が、自給的な「生産物」として、牧民の生活のほとんどの領域をカバーする道具として用いられていることが示された。畜糞の一部は地域で販売されていたが、多くが自家消費に供されてい

た。畜糞利用の多角性は、牧民が畜産物としての畜糞に依存していることを示唆するものであり、また、自給自足的な生産・消費のあり方はモンゴル牧畜の生業性を示すものといえるだろう。

IV 「家畜＝畜糞」関係の再帰性

本章では、前章で提示したモンゴルの畜糞利用データの分析を通して、モンゴルの牧畜における家畜と畜糞の関係を議論する。具体的には、畜糞利用の「共時的な多角性」と「通時的な可変性」について検討をおこない、とくに牧畜に関わる領域での畜糞利用の特徴を「再帰性」という概念で説明していく。

まず、畜糞利用の共時的な多角性を示すために、畜糞が利用される領域・分野・使途と家畜種との関係を表2に示した。畜糞が支える領域は大きく分けて、人間用、牧畜用、農業・農耕用（以下、農業用とする）の3つに分けられる。人間用のうちわけとして、燃料とそれ以外の生活用具という

2分野がある。その具体的使途として本論では、燃料の自家消費、燃料の販売、治療薬など5つを取りあげた。牧畜用のうちわけには、家畜囲いの設備、家畜管理、畜産物加工の3分野があり、その下に14の使途があった。使途の数は合計20個あり、そのうち2個（治療薬とト占）は文献から得た情報であるが、残りの18個は筆者が実際に観察したものである。本論の範囲でいえば、3領域の使途の数、合計20個のうち70%（14個）までもを「牧畜用」が占めている点に注目したい。

使途別の畜糞利用の頻度を家畜種別に数えたところ（表2の●の数）、筆者の調査に限れば、「燃料」を「自家消費」する場合に限って全種類の家畜の糞が利用されていた。領域ごとの合計では、牧畜用の利用頻度が20と、全3領域の中で最も多かった。これら2つのことから、畜糞の利用は牧畜ととくに強く結びついているといえる。補足として、家畜の種類別に利用頻度を比較すると、ウシ・ヒツジ・ヤギが同点で各27%を占め（3種

表2 畜糞が利用される領域・分野・使途と家畜種との関係

領域	分野	使途	ウシ	ウマ	ヒツジ	ヤギ	ラクダ	小計	領域合計
人間用	燃料	自家消費	●*	●	●	●	●	5	15
		販売	●					1	
	生活用具	治療薬**	●	●	●	●	●	5	
		ト占**			●	●		2	
		照明			●	●		2	
牧畜用	家畜囲い	寝床マット			●	●		2	
		ブロック			●	●		2	
		塗り壁材	●					1	
	家畜管理	放牧中に投擲	●	●				2	
		哺乳抑制	●					1	
		補助飼料		●				1	
		治療薬	●					1	
		害獣除け				●	●	2	
	畜産物加工	保温				●	●	2	
		燻蒸殺菌	●					1	
		燻蒸味つけ	●					1	
		燻蒸香りつけ	●					1	
		害虫除け	●					1	
		害鳥除け				●	●	2	
農業用	肥料			●	●		2	2	
合計			10	4	10	10	2	37	37

*当該の使途に糞が利用されている家畜種に●をつけた。

**包 [2014: 188-194, 209-213] による。

類合計で81%)、ウマ・ラクダ(合計19%)と比べてはるかによく利用されていた。

次に、畜糞利用の通時的な可変性について述べる。一種類の家畜が排泄した糞は、時間の経過とともに変化し、その状態変化ともなって利用の目的と方法が変わっていた。最もよく使われる畜糞として挙げられたヒツジ・ヤギの糞(各27%)を例にとると、排泄されたばかりの粒状で湿潤な糞「ホルゴル」は乳製品のトビ除けに使用されていた。これが乾燥すると照明材料や玩具となる。オオカミが出没すればヒツジ・ヤギの糞は集められて燃やされ、その煙がオオカミ除けの効果を期待されていた。乾燥した糞がヒツジ・ヤギに踏みつけられ、熟成して時間が経つと「ポーツ」に変わった。ポーツは家畜の寝床の保温マットになるほか、耕作地に運んで肥料として使われた。ポーツの下層の踏み固められた部分である「フルズン」は割り出され、そのブロックが家畜囲いの建材となり、また燃料としても火力の強さが高く評価されていた。フルズンが燃えると灰になるが、畜糞の新鮮な焼却灰は切創に塗ると止血や殺菌の作用があるといわれてきた [包 2014: 193]。

このように、畜糞はそのバイオグラフィーの中で状態を変化させ、その時間的なプロセスの中で畜糞と人間との接点は増え、畜糞が関与する領域は広がり、人間と畜糞との関係は多層的なものになっていく。牧民は、精緻な民俗知識にもとづいて、畜糞を排泄直後から灰に至るまでの状態に応じて、さまざまな領域で、さまざまな方法・目的に利用してきたのである。

以上から、畜糞の利用には共時的な多角性と通

時的な多層性がみられることが示されたが、いずれも、人間の生活を直接に支えるというよりも、とくに牧畜と強く結びついた領域でそれが発揮されていた。このことは、使途の細目の数からも、家畜種別の利用頻度からも明らかである。

畜糞・家畜・人間の関係を図2に示した。図2の左半分は家畜と畜糞の関係となっており、家畜が糞を排泄し、畜糞は家畜に対して、家畜囲い・家畜管理・畜産物加工の道具などとしての便益を与える。そして、これは人間の介入によって成りたっている。具体的には、牧民は家畜たちを、家畜の排泄物で作った囲いに入れ、畜糞マットの上に寝かせる。家畜管理については、放牧中には畜糞を投げつけて群れの行動をコントロールし、人間が母畜から乳を得るために仔畜のいやがる畜糞を乳に塗りつけ、オオカミが来れば畜糞の煙を谷中に焚きしめ、弱ったり病気になったりした家畜には異種家畜の糞を食わせることでその生存率を高める。家畜から得られた乳や肉を保存・加工するさいにも、畜糞でこれを殺菌し、鳥や虫から守り、そして畜糞で肉を燻してスモーク味をつけて嗜好性を高めていた。このようにモンゴルの牧民は、家畜の排泄物である畜糞を道具として家畜を育て、その排泄物を用いて畜産物を加工する、というきわめて再帰的な「家畜=畜糞関係」システムを作り出し、日々実践してきたのである。牧民による介入の意義は、家畜の群れの状態や個別の個体の必要に応じて、適切な種類・状態の畜糞を適切な方法で与えるための知識・技術と労働にある。図2の右半分には人間と畜糞の関係が示されている。人間が家畜の排泄物に加工や採集といっ

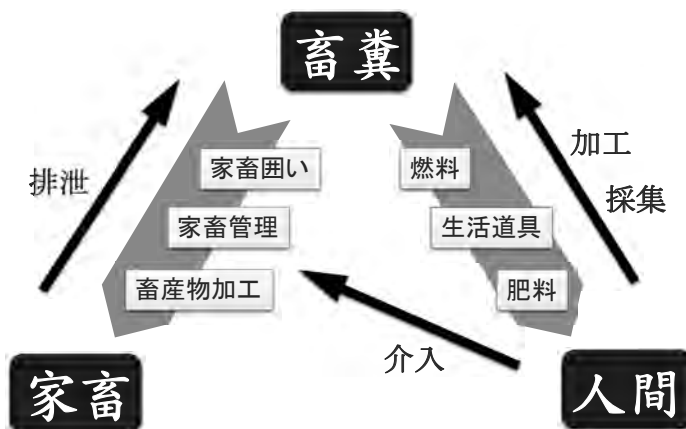


図2 畜糞・家畜・人間の関係

た労働投下をおこなうことで、畜糞はアルガルやポーツといった有用性の高い物質に変化し、これが燃料・生活道具・肥料などの用益を人間に与えていた。

このように、畜糞=家畜=人間の3者間には、畜糞を中心とした循環的な関係が形成されていた。その中でもとくに畜糞と家畜の関係は再帰性に特徴づけられていた。以上から、家畜を所有・飼育する人びとが畜糞という畜産物に強く依存し、畜糞によって家畜を世話し、食物を加工し、照明器具など生活の道具を得ている生業的なしくみが示された。

V 産業社会における畜糞

本章では、スケールをモンゴル国の社会状況全体に広げ、産業化の進むモンゴル社会における畜糞の位置づけを、人びとのアイデンティティーの観点から考察していく。モンゴルでは20世紀以降に都市化が進み、2012年現在の都市化率は65.9%に達し [NSO 2013a: 83]、牧畜従事者は人口の10%にまで減っている [NSO 2013a: 80, 222]。輸出においては鉱業産品が9割を占め [NSO 2013a: 277]、モンゴルは都市化と工業化の進む社会である。

生産史は生業から生産、産業へと移行してきたが、モンゴルの畜産物はその流れに位置づけたのが図3である。畜産物は基本的に「息以外すべて」自家消費されているのであるが、肉・乳・毛(カシミア・羊毛)・毛皮・皮革・乳については、国家統計年鑑の「主要農業生産物の生産量」の項に記載されていて [NSO 2013a: 210]、小腸・内臓

は加工品として輸出量が示されていることから [NSO 2013a: 273]、生業・生産・産業のすべての領域で利用されているといえる。これに対して畜糞は、主に自家消費され、一部が地域内で商品交換されるが、その生産量も輸出量も国家統計年鑑には記されていない。つまり畜糞は生業と生産の範囲で利用されているといえるだろう。産業化と牧畜文化は、生業の極と産業の極から逆方向に向かうベクトルとして畜産物に働きかけ、両者は生産のあたりで交差し、混ざりあっているのであるが、牧畜文化の方は産業社会に対しても影響していることを、以下では畜糞に注目して論じていく。

畜糞は主に牧民と地方の人びとによって利用されているのであるが、では、人口の7割近い都市生活者にとっては無縁のモノなのだろうか。いや、そうではない。畜糞はモンゴル人のアイデンティティーを支えている。その背景として、モンゴル人のアイデンティティーの基盤が牧畜生活とのつながりにあることがある。というのも、モンゴル国の人口の約95%はモンゴル語を母語とするモンゴル人であり (2010年現在) [NSO 2013b]、草原の牧民と都市生活者は同一民族である。都市生活者のほとんどが、20世紀以降に、進学・就職・退職等を契機に草原から都市に居所を移した者とその子や孫であり、草原にルーツをもつ [Kazato 2017]。本特集の目的は、さまざまなライフスタイルを選択している同一民族に属する諸個人が (本特集「序」参照)、どのように牧畜にコミットしているかを記述することを通して、その総体としてのモンゴル牧畜文化の現在を浮かびあがらせるものであった。

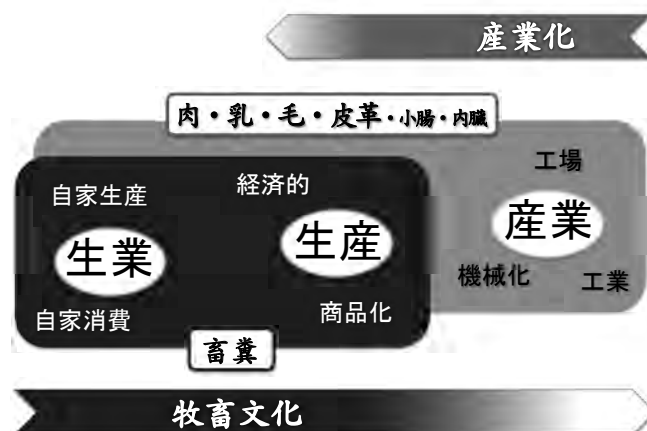


図3 畜糞をめぐる生業と産業の関係

そこで、畜糞が文化に埋めこまれていてモンゴル人の牧畜アイデンティティを支えていることを、学校教育と文学を例として示す。モンゴル国の小学校2年生用の『モンゴル語教科書』には「アルガルの煙 (*argalyn utaa*)」というフレーズが登場し、生徒たちはアルガルの絵を描いてから、文法(属格)を学ぶ [Baagii 2011]。約7歳の子どもたちがウランバートルをはじめとする定住地の学校で乾燥牛糞の絵を描き、「アルガルの煙」というフレーズを唱和し、これをキリル文字でノートに書くのである。小学校低学年の教科書にアルガルの煙が登場するのは、アルガルおよびアルガルの煙がモンゴル文学、とくに詩の重要なテーマだからである。

アルガルを取りあげた詩は多いが、最も著名な作品はC・チメド(1927~1980年)の詩「私はモンゴル人」であろう。「アルガルの煙たなびく牧民のゲルに生まれた私 自然のままの草原である故郷を 私の揺りかごとと思う」で始まるこの詩は、幼稚園児向けの詩の誦読コンテストの人気課題でもあり、モンゴル人なら誰でも知っている⁴⁾。後に、内モンゴル人のロック歌手・テンゲル(騰格爾)がこの詩に曲をつけて歌ったことから、この詩は国籍を越えてモンゴル民族が愛する詩となった。「私はモンゴル人」という詩の最初の言葉が「アルガルの煙」であることに象徴されるように、「アルガルの煙」の匂いはモンゴル人のアイデンティティの感覚的な基盤である。内モンゴル出身で長く日本に暮らす人類学者の包海岩氏は、「アルガルの煙」という言葉の響きそのものが草原育ちのモンゴル人にはゲルでの生活を想起させ、モンゴル人のアイデンティティと結びつくこと、都市で生活するモンゴル人はアルガルの煙の匂いをかぐとリラックスできること、を自身の博士論文の中で述べている [包 2014: 200-201]。

体制転換以後では、ロック・ミュージックの歌詞にもアルガルが登場する。民主化直後に活動を開始したヘヴィー・メタル・バンド「ホールド」(1993~)の楽曲「後からでは求められない愛」(2001年頃)は「アルガルを集めて歩いた小道はみつからない アルガル採集かごを背負った人影は目に空疎に映って」に始まるフレーズで、望郷の念と母への愛を歌っている。アルガル採集は女性の仕

事であり、畜糞を裏返したり、乾いたものを専用かごに回収したりする女性の姿が、モンゴル人にとっての母の原風景として表象されているものと考えられる。

アルガルの煙が、ゲルでの暮らしや故郷の草原と結びついて人びとの郷愁を喚起するのは、なんといってもその空間いっばいに広がる匂いによるものである。モンゴル国のモン・アールツ社は、都市生活者の感覚と自伝的な記憶の喚起に働きかける商品として「アルガルのお香」(特許番号10304)を販売している。同社はこれまでモンゴルの野生ハーブを原料とした仏具としてのお香を生産してきた。これに対してアルガルのお香は、都市生活者がマンションの一室でアルガルの煙をたなびかせ、ゲルのかまどの匂いを部屋に満たし、故郷・ゲル・母などを想起するための「癒し」グッズである。この商品は、顧客が以前にアルガルの煙の匂いをゲルや草原で嗅いだ時の肯定的な経験を前提とした、ノスタルジーの商品化であるといえる。

以上から、畜糞は牧畜生活において燃料をはじめとする生活の多くの領域で不可欠な物質文化であるだけでなく、アルガルというモノ、その煙、その匂い、そしてそれらを表す言葉は、牧畜生活に関するモンゴル人の観念世界を支えていた。とはいえそれは家畜の糞である。13世紀以来、モンゴルを訪問した外国人は畜糞に対して汚いというイメージを抱き、現代日本の畜産業では畜糞の腐敗による悪臭公害が問題となっている。しかしモンゴルでは、畜糞を分解させずに速乾させ、資源化するためのさまざまな努力がおこなわれていた。「アルガル採集かごを背負った人影」というフレーズは、アルガルを裏返したり、拾ったりしながら歩く母の身体を、「アルガルの煙」は実家のゲルで母が乳製品を加工しながらかまどにくべるアルガルが燃える匂いを、読み手と聴き手に想起させるのである。こうした連関は、都市の子どもであっても、幼児期から聞いて覚えた詩の言葉と、草原のゲルを訪ねたさいの実体験を組み合わせることで修得していくものであると考えられる。その結果として、アルガルは個別の便益を超えて、モンゴル人の牧畜生活の記憶に働きかける文化装置として、幼児教育から学校教育、そして大人の癒しの時間にまで埋め込まれたものとなっている。

図3の下の矢印「牧畜文化」は、畜糞という物質文化が、その煙の匂いという本来的にはプライスレスな物質を通して、産業化された領域を含むモンゴルの全社会領域で生きる人びとに対して、モンゴル牧畜文化への自己同一化を促す力をもつことを示している。畜糞は産業社会の経済的価値基準においては周縁に位置づけられるが、モンゴルにおいて畜糞、とくにアルガルは思考の材料となり、アルガルの煙は匂いという感覚と言葉の力を通じて都市生活者および全世界のモンゴル・ディアスポラに草原での生活の記憶を呼びおこすのである。

VI 結論

畜糞は産業社会では廃棄物であるが、モンゴルでは畜産物として位置づけられてきた。モンゴルにおける畜糞の利用方法と、畜糞が生活のどの領域に埋めこまれているのかを明らかにし、牧民の畜産物への依存のあり方を検討してきた。モンゴルは社会主義的な集団化や市場経済化を通して産業化されてきた。しかし、畜糞は燃料その他として自家消費されるとともに、一部がローカルに流通していた。畜糞の用途は多岐にわたり、生活のほとんどの領域をカバーしていたが、家畜管理や畜産物加工といった牧畜領域での利用が最も発達していた。とくに注目に値するのは、モンゴルの牧民が、家畜の排泄物で家畜を飼育し、その畜産物を畜糞によって加工するという再帰的な「畜糞＝家畜関係」システムを作りあげているという点であった。

畜糞利用と「生業／産業」の関係について結論づけるために生業の定義をふり返ると、経済的には自給と自家消費、文化的には文化諸要素との多面的な結びつきが核となっていた。自給と自家消費についていえば、モンゴルの牧民は社会主義期から市場経済化期を通して一貫して家畜を飼育し、その肉・乳・毛・皮革・畜力・畜糞などの畜産物に依存してきた。畜産物生産は基本的に産業化されたが、畜糞だけは自家消費およびローカルな流通にとどまった。文化諸要素との結びつきに関しては、畜糞の利用においては「共時的な多角性」に加えて、畜糞のバイオグラフィーの中で人間との関係や用途が変わっていくという「通時的な可変性」が特徴的であり、また、畜糞が思考の道具

として文学の題材や学校教育に取りこまれ、都市生活者のアイデンティティーの手がかりとなるなど、畜糞は文化に埋めこまれていた。つまり、モンゴルの家畜飼育は国家の産業として枠づけられているが、畜糞の多角的な自家消費、再帰的な「畜糞＝家畜関係」、畜糞の文化への埋め込みの三点は生業的な「牧畜文化」の存在を示し、このことからモンゴルの牧畜は「生業」要素と「産業」要素の混合として成り立っているといえる。

「生業／産業」要素の併存を、畜糞を取りあげて、モンゴル地域を事例として証明した意義を述べると、畜糞は生き物である家畜と比べて、人間に訴えかけたり、その結果として人格的な関係が生じたりすることが少ない。しかしながら、モンゴルの人びとは畜糞から色・形・湿度・燃え方・匂いなどの多様な情報を得て、共有し、集合的な価値の世界を作りあげてきた。社会主義化と市場経済化による二重の産業化を経験しているモンゴル国に生業的な要素がみいだされたということは、グローバル化する世界の中で「牧畜文化」が生きて存続していることを示す強い証拠となるだろう。

最後に、人類学的な牧畜研究への貢献について述べて終わりたい。本論は、物質文化研究の視点からの牧畜論である。すでに家畜の身体から離れて乾燥した糞や、その煙の匂い、そしてそれらを表す記号（言葉）からさえも牧畜生活の全体を想起してしまうような、モンゴルの人びとの高次に「牧畜化」された感覚・知覚が、産業社会の中にも息づいていることが示された。そのような感覚・知覚は、畜糞に対する精緻な認識、手間のかかる加工と採集、短期的な使い分けおよび長期的な状態変化を見越した介入と利用、そして家畜とその排泄物が相互に支え合うようなシステムの創出・維持といった、畜糞と家畜と人間のあいだの日常的な関係実践の繰り返しの中で作られたものであった。これまでの牧畜研究では人間と家畜の関係行動が重視されてきたが〔谷 1976；菅原 2017：232-279〕、家畜の放牧は主に男性の役割であって、成人女性は搾乳の時に泌乳メスと関わる以外は、畜産物の加工や家事に従事することが多い。牧畜民の半数は女性であるが、彼女たちは畜産物というモノとの関係実践を通して牧畜文化を作りあげてきたのである。畜糞という物質文化に焦点を当てた牧畜社会研究は、女性の視点によ

る牧畜文化論ともいえるだろう。

謝辞

本論文の調査は、平和中島財団、JSPS科研費00J03527、03J04528、19529002、23720425、26300013の助成を受けて可能になった。本稿執筆にあたっては、本特集の関係者、査読者、編集担当者から多くの助言と励ましをいただいた。さらに、モンゴル国の人びとの協力が本研究を可能にしてくれた。ここに記して謝意を表します。

注

- 1) オブス県の富裕な牧民は、冬季には石炭を購入して燃料としているという(寺尾萌氏私信 2017年3月1日)。
- 2) バイ・バリクやハル・バルガルなどのウイグル時代の遺跡は、後のモンゴル帝国の首都カラコルムの遺跡群とともに、2004年に「オルホン渓谷文化的景観」としてユネスコ世界文化遺産(No.1081rev)に登録されている[UNESCO 2017]。
- 3) 査読者から、「内モンゴルには家畜群に糞を投げつけてもよいが、石はいけないというタブーがある」ことをご教示いただいた。モンゴル国の年長者たちにタブーについてメールでたずねたところ、石は危ないという意見はあったが、文化的な禁忌かどうか確認できなかったため、この点については今後の課題とする。
- 4) モンゴルには口承文芸の伝統があり、その上で、20世紀以降に書かれた詩が現代の古典として定着している[蓮見 1993: 56-84, 96-119]。アルガルが登場する現代古典詩には他に、O・ダシバルバル(1957~1999年)の「若者、私の弟妹たちへ贈る詩」、ポンツァク・バダルチ(1939年~)の「母の心」などがある。モンゴル人は幼児期から詩や小咄などを聞いて覚え、やがて自ら作詩して対面コミュニケーションや手紙、Facebook等で自身の気持ちや主張を他者に伝える手段としている。

参考文献

Baagii Bataa

- 2011 Er ugend iin zalgan bicheh. http://www.slideshare.net/bataa_8808/er-ugend-iin-zalghan-bicheh (2017年2月9日閲覧)

包 海岩

- 2014 「社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化——社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ」平成26年度名古屋大学大学院文学

研究科・学位(課程博士)申請論文。

- 2015 「畜フン名称体系——内モンゴル自治区シリ
ンゴル盟を中心に」『沙漠研究』25(2): 33-
41。

バトゥール ソイルカム、小松 知未、森田 泰之、
志賀 永一

- 2010 「2000/01年ゾドにおける被害の畜種別規定
要因」『北海道大学農経論叢』65: 69-81。

Bolorsoft LLC

- 2016 Bolor Dictionary. <http://www.bolor-toli.com>
(2017年2月9日閲覧)

Central Statistical Board under the Council of Ministers
of the MPR

- 1981 *National Economy of the MPR for 60 Years
(1921-1981)*.

遠藤 仁

- 2015 「インド北西部における家畜糞利用の現状と
課題」『沙漠研究』25(2): 53-58。

二木 博史

- 1993 「農業の基本構造と改革」『変革下のモンゴル
経済』青木信治(編)、pp.103-133、アジア
経済研究所。

蓮見 治雄

- 1993 『チンギス・ハーンの伝説——モンゴル口承
文芸』角川書店。

林 俊雄

- 1999 「草原世界の展開——中世の中央ユーラシ
ア」『中央ユーラシアの考古学』藤川繁彦
(編)、pp.263-339、同成社。

波佐間 逸博

- 2016 『牧畜世界の共生論理——カリモジョンとド
ドスの民族誌』京都大学学術出版会。

Herskovits, Melville J.

- 1926 The Cattle Complex in East Africa. *American
Anthropologist* 28(3): 494-528.

Humphrey, Caroline and David Sneath

- 1999 *The End of Nomadism?*. Duke University Press.

今村 仁司

- 1994 「市場」『社会学事典』見田宗介、栗原彬、田
中義久(編)、p.361、弘文堂。

稲村 哲也

- 2009 「『熱帯高地』の比較研究——ヒマラヤ・チ
ベットとアンデスにおける高度差利用」『ヒ
マラヤ学誌』10: 115-134。

Kazato, Mari

- 2017 Versatile Living under Socio-natural Fluctuations
in Mongolia: Movement between Urban and

- Pastoral Areas、『沙漠研究』26(4):227-231。
- 風戸 真理
- 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる』世界思想社。
- 2016 「モンゴル国における住居フェルト生産の変遷——工業製品と手作業の製品」『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』風戸真理、尾崎孝宏、高倉浩樹(編)、pp.5-27、東北大学東北アジア研究センター。
- 経済産業省・資源エネルギー庁
- 2016 「なっとく! 再生可能エネルギー」http://www.enecho.meti.go.jp/category/saving_and_new/saiene/renewable/biomass/(2017年2月9日閲覧)
- 小林 修一
- 1994 「産業化」『社会学事典』見田宗介、栗原彬、田中義久(編)、p.340、弘文堂。
- 小磯 学
- 2015 「ヒンドゥー教における牛の神聖視と糞の利用」『沙漠研究』25(2):43-51。
- 小長谷 有紀(編)
- 2014 『梅棹忠夫のモンゴル調査——ローマ字カード集』国立民族学博物館調査報告122。
- 近藤 順治、廣部 宗
- 2013 「家畜放牧と草原の窒素循環」『モンゴル——草原生態系ネットワークの崩壊と再生』藤田昇、加藤聡史、草野栄一、幸田良介(編)、pp.181-184、京都大学学術出版会。
- 松井 健
- 2011 「フィールドワーク、〈生きる世界〉、グローバリゼーション」『グローバリゼーションと〈生きる世界〉——生業からみた人類学的現在』松井健、名和克郎、野林厚志(編)、pp.1-17、昭和堂。
- Mongol Ulsyn Eronhiilogchiin Tamgyn Gazar
- 2016 Mongol Helnii Ih Tailbar Toli. https://mongoltoli.mn/search.php?opt=1&ug_id=18379(2017年2月9日閲覧)
- Myagmar, G.
- 2006 *Mongolyn Esgii, Esgii Edleliin Uusel, Hogjil*. Bitpress HHK.
- NSO (National Statistical Office of Mongolia)
- 1997 *Mongolian Statistical Yearbook 1996*.
- 1999 *Mongolian Statistical Yearbook 1998*.
- 2000 *Mongolian Statistical Yearbook 1999*.
- 2001 *Mongolian Statistical Yearbook 2000*.
- 2002 *Mongolian Statistical Yearbook 2001*.
- 2005 *Mongolian Statistical Yearbook 2004*.
- 2008 *Mongolian Statistical Yearbook 2007*.
- 2010 *Mongolian Statistical Yearbook 2009*.
- 2013a *Mongolian Statistical Yearbook 2012*.
- 2013b Census and Survey Catalogue, DDI-MNG-NSO-ENG-PHC-2010-v1.0. <http://web.nso.mn/nada/index.php/catalog/89/datafile/F3/V139>(2017年2月9日閲覧)
- 太田 至
- 1982 「牧畜民による家畜放牧の成立機構——トゥルカナ族のヤギ放牧の事例より」『季刊人類学』13(4):18-60。
- 1987 「家畜の『個性』の認知、およびその意味についての試論」『アフリカ——民族学的研究』和田正平(編)、pp.817-827、同朋舎。
- 小貫 雅男
- 1993 『モンゴル現代史』山川出版社。
- 尾崎 孝宏、森永 由紀
- 2016 「内モンゴルおよびモンゴル国における乳畜をめぐる生産・流通・消費」『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』風戸真理、尾崎孝宏、高倉浩樹(編)、pp.61-97、東北大学東北アジア研究センター。
- プラノ = カルピニ
- 2016 「プラノ = カルピニのジョン修道士の旅行記——『モンゴル人の歴史』」『中央アジア蒙古旅行記』カルピニ/ルブルク著、護雅夫訳、講談社(原著は13世紀)。
- プルジェヴァリスキー、ニコライ・M
- 1981 (1875) 『蒙古と青海(上)』高橋勝之、谷耕平、田村秀文訳、原書房。(Монголия и страна Тангутов, Имл. рус. геогр. о-во.)
- 堀田 あゆみ
- 2016 「モノの流通と消費にみるモンゴル遊牧民の生存戦略」『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』風戸真理、尾崎孝宏、高倉浩樹(共編)、pp.131-159、東北大学東北アジア研究センター。
- 佐藤 俊
- 1992 『レンディーレー——北ケニアのラクダ遊牧民』弘文堂。
- 鹿野 一厚
- 1999 「人間と家畜の相互作用からみた日帰り放牧の成立機構——北ケニアの牧畜民サンプルにおけるヤギ放牧の事例から」『民族学研究』64(1):58-75。
- Sneath, David

- 1999 Spatial Mobility and Inner Asian Pastoralism. In *The End of Nomadism?*. Caroline Humphrey and David Sneath (eds.), pp.218-277. Duke University Press.
- 菅原 和孝
2017 『動物の境界——現象学から展成の自然誌へ』弘文堂。
- 立入 郁、篠田 雅人
2013 「モンゴル草原地域における放牧庄の推定とその陸域生態系モデルへの導入」平成25年度鳥取大学乾燥地研究センター共同研究（一般研究）の研究発表会（ポスター発表）、12月6日、鳥取大学。
- 田中 義久
1994 「産業」『社会学事典』見田宗介、栗原彬、田中義久（編）、p.340、弘文堂。
- 谷 泰
1976 「牧畜文化考——牧夫－牧畜家畜関係行動とそのメタファ」『人文學報』42：1-58。
1994 「牧畜」『文化人類学事典』文化人類学事典編集委員、pp.699-701、弘文堂。
- 富田 敬大
2016 「近現代モンゴルにおける畜産物利用の変化——乳・乳製品の域外販売と域内消費に着目して」『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』風戸真理、尾崎孝宏、高倉浩樹（編）、pp.29-60、東北大学東北アジア研究センター。
- UNESCO
2017 UNESCO Web Site. <http://whc.unesco.org/en/list/1081>（2017年1月24日閲覧）
- 山本 紀夫
1997 「熱帯アンデスにおける伝統農業とその変化——中央アンデスを中心に」『熱帯農業』41(2)：115-122。
2014 『中央アンデス農耕文化論——とくに高地部を中心として』国立民族学博物館調査報告117。
- 吉田 順一
1982 「アルガルとホルゴル——モンゴル畜糞燃料考」『史滴』3：64-86。

(2017年2月25日採択決定)

Is Mongolian Pastoralism Subsistence Activity?

Case Study of the Diversified Utilization of Animal Dung

Mari Kazato

[Mongolian pastoralism, animal dung, subsistence activity, industry, identity]

This paper, through the example of the use of animal dung, aims to discuss how the subsistence and industrial spheres have coexisted to form “Mongolian pastoralism.” Mongolia is a post-socialist country, and the former socialist economic policy, which lasted seventy years, turned the country’s livestock production into an industry, promoting it for exports. However, anthropologists use the term “herders” to describe Mongolian animal owners and keepers. Especially, ecological anthropologists who studies of pastoral societies have distinguished Mongolian herders from the stock-raising and dairy farmers of industrial society, defining the former as people engaged in the activity for subsistence. Why are the economic activities of Mongolia considered subsistence pastoralism?

“Pastoralist” can be defined as that people who own and raise their domestic animals and rely on the

products which is exploited from their animals. And that, such producing and consuming activities tie to cultural elements of their whole culture and society in many ways and to form “the pastoral culture.” However, the modern human life is constructed as the mixture of the elements of “the industry” and the elements of “the subsistence.” Mongolian livestock production was received pressure to be industrial at a national economic policy level by double times such as a socialist policy from the 1920s and the marketization from the 1990s; but people did not abandoned to consume livestock products by themselves self-sufficiently and use them as gift to relatives and friends. They were ways to use livestock products in subsistence ways. The prior studies pointed out that the proportion of the subsistence elements and the industry elements had changed by the time went by and by the kind of livestock products.

This paper, focusing on domestic animal dung, investigates how the subsistence and industrial spheres coexisted to form Mongolian pastoralism today. Although industrial society categorizes animal dung as troublesome waste to be eliminated, many pastoral societies worldwide consider it as a useful livestock product. We describe how animal dung is produced and consumed in herder households, then analyze how herders rely on livestock products, and in which domains of life livestock products are embedded as a cultural element.

The third chapter presents the results of the study, describing the characteristics of the relationship between humans and animal dung. For that purpose, it gives descriptions of a naming system for animal dung, as well the different ways animal dung is produced and used for building materials, tools for animal raising such as the thermal soil mat (*buuts*), and means for processing dairy products. Animal dung is used for versatile purposes in various domains of herders’ daily lives. Thus, we can say that humans rely on animal dung as livestock products. Such self-sufficient ways of producing and consuming animal dung shows that Mongolian livestock production is with subsistence sphere.

The fourth chapter which follows goes on to discuss characteristics of animal dung usage in Mongolia, focusing on the relationship between animals and their dung. They have created an extremely “reflective” animal-dung circulation system, practiced every day, to raise animals with animal dung and process products by animal dung. In addition, Animal dung has been used for many purposes at a time. After some time passes, its condition changes, allowing it to be used for other purposes. The “reflective” animal-dung circulation system based on the biography of animal dung may indicate a pastoral culture.

The fifth chapter discusses the position of animal dung in industrial society. Mongolia is now an industrial society, and animal products are basically linked to the national economy. However, animal dung is mainly used for self-consumption, without being circulated through the whole country or being exported. In addition, animal dung influenced the identity of both rural and urban Mongolians. The word *argal* (dry cattle dun), along with its smoke and smell, has been an important theme of Mongolian literature, especially in poems, and has played the role of a “thinking tools.” Thus, animal dung not only functions to profit each person, but also serves as a cultural device in the pastoral memories of Mongolians.

The last chapter, the conclusion, points out the significance of the fact—proved through the observation data of animal dung usage after marketization—that subsistence and industrial factors have coexisted in Mongolia. Though Mongolian animal production is framed by national industrial policy, a micro observation of the relationship between Mongolian herders and animal dung shows that a subsistence “pastoral culture” can also be found. That is, Mongolian animal production consists of a mixture of elements that cannot be separated easily into subsistence and industry. Though Mongolian animal production has been turned into an industry through both socialist collectivization and market economization, subsistence factors also exist. It can be concluded that this is strong evidence that a pastoral society exists based on a “pastoral culture,” even in the globalized world of today.